

明治初期・福島県俳人の「俳句書留」について

綿 拔 豊 昭

はじめに

現在の福島県内に在住であったと考えられる、複数の俳人の俳句を書き留めた句集を所蔵する。その俳人の一人に「壮山」がいる。壮山は福島県の俳句史においては看過できぬ存在の「道山壮山」のことではないかと思われる。とすれば、福島県の俳句資料としてそれなりの価値があるものといえよう。これまで紹介されたことのないものかと思われるので、ここに紹介し、若干の考察を加えたい。

一

稿者が所蔵する写本の一点に、複数の俳人の句を書き留めたものがある。収録された句数は全一二〇四句である。内題・外題等書名に関する情報がないため、仮に「俳句書留」と称することにする。また書き留めた人物の情報もな

いので、仮に「書留者」と称することにす。

まず簡略ながら書誌について述べたい。

本文の記された料紙と同じ料紙（楮紙）の表紙が、紙縫りで綴じられている。それとは別に糸を通すための穴があることから、糸で綴じられた原表紙がもとはあったが損なわれたと考えられる。すなわち、もとの遊び紙が表紙になっている、仮表紙の状態といえよう。袋綴じ、写本一冊、縦一三・九cm、横一九・二cm、料紙は楮紙、五六丁である。俳句を書き留めた横本の写本にはよくみられる大きさである。一句一行、一面一二〜一四行、字高は縦約一三cm、横約一六cmである。天地の余白が少ないことは、備忘録的に俳句を書き留められた横本によくみられる。原表紙がないため、そこに工夫等があったかもしれないが、残存した状態のものに限っていえば、ごくありふれた形態で、特に記すべきことはない。

一丁目表・裏は以下のようにある。なお便宜上、洋数字で通し番号を付す。難読は□で示す。

慶応三年丁卯仲冬繼於前冊念二日ヨリ書記

1 つむ雪の音のするなり葉喰 壮山

2 鉢植をひとつ持たる寒哉

3 それ鷹のふみ落しけり松の霜

4 三日月の入る迄見ゆる寒さ哉

5 江のうへやいつこをさして鷹の行

6 鯉くふた友はもれまし葉喰 清知

7 雪な引を見て居る暮の湯守哉

8 鍋ひとつ俄世帯や葉喰

9 拭揚の届へて寺の寒かな

- 10 宿かりて日脚詠むる冬至哉
漸風
- 11 板橋や足駄て渡る音寒き
- 12 つい／＼と芦の穂先や積る雪
松濤
┌ (1才)
- 13 雪の夜やうら戸に近く鳴狐
- 14 出る月の向ふて軽し枯尾花
- 15 往もとり皆人くゝる柳哉
土国
- 16 旅立のこゝろ定まる柳かな
- 17 町うらの細き流れや月と梅
- 18 船はたを叩て見るや嶋の梅
- 19 農男のめし喰にくる柳哉
壮山
- 20 寒丈ケは過し寒さや江の柳
- 21 春寒きかきあげ城の柳哉
- 22 出嫌ひを誘ひ出す日の霞哉
- 23 ゆつくりと寝て起た日の霞哉
- 24 終日の風に日暮る柳かな
漸風
- 25 鐘霞む柴の戸にとく草鞋かな
- 26 草臥た足たて直す柳哉
土国

右の冒頭によれば、本書の成立は慶応三年（一八六七）十一月二十二日以後である。
書き終えた年月日については記されていないが、俳句の書き留めなので、多少前後することはあろうが、大方時系
列とみなされる。そして巻末近くに以下のようにある。

乙亥の冬

1166 起揃ふ里のけふりや雪の中 壮山

慶応三年以後でもっとも近い「乙亥」の年は明治八年（一八七五）である。また1188及び1189の句は以下のようにある。

1182 まとまらぬ手紙も年の余波哉

福島の客社に春を迎えて元日の寒は怵へはしめ哉といふ祖父翁の句を鑑て

1183 元日の不自由やこゝか忍ふ山 清知

1182の「年の余波」は、時系列で並んでいるとすれば明治八年の年末と考えられる。そして次の1188は明治九年の元日のものであると考えられる。なお「清知」が福島県須賀川の「山辺清知」であれば、「祖父翁」は「山辺清民」であり、句中の「忍ふ山」は「忍ぶ」と福島県にある「信夫山」を掛けていよう。

巻末の句は以下のようにある。

1204 鶯や今来し道に跡まよへ （無記名）

「鶯」とあることから春の句であり、時系列であるならば明治九年の詠句と考えられる。

以上から慶応三年十一月から明治九年春までの俳句が書き留められたと考えられ、成立も明治九年春と考えてよろう。

冒頭に「継於前冊」とあるので、慶応三年十一月以前から書き留められたことはわかるが、いつから俳句の書き留

めがなされたかは不明である。また俳句を書き留める行為は、俳句を嗜む者にはよくみられることなので、生存していれば本書以後も継続して書き留めがなされた可能性は高いが、いつまで書き留めがなされたかは不明である。

二

先にあげた冒頭には、1の句に「壯山」とあり、2～5には俳号が記されていない。同じ詠者が続く場合は「、」が名前の位置に付けられるので、無記名は書留者が詠じたものと考えられる。名が記されている句は、文音や句会で同座したおりの俳句の書き留めと思われる。この無記名の俳人について、姓名など具体的に誰だかわかる情報はこの書き留めには記されていない。しかしながら、

我みちのくの風土は

585 麦時の跡尻秋に追れけり

とあるので、「みちのく」すなわち東北地方の人であることがわかる。

無記名の俳句には、地名等が詠み込まれたり、またそれが記された前書きのある俳句がある。それらを「東北地方在住の俳人の句」という視点で以下みていく。

高茄子より三春に至る途中

44 山城の早見へかゝるかすみかな

「高茄子」は不明。あるいは栃木県の「那須」か。「三春」は現在の福島県田村郡三春か。とすれば句中の「山城」は

三春城である。三春城は、明治四年、廃藩置県により廢城となる。

65 罇りに遊過けり浅香山

前書きはないが、句中の「浅香山」は今の郡山市にあるものであろう。「奥の細道」によれば須賀川を出立した芭蕉が寄った地である。

棚倉の帰るさ足草臥たれば

66 澄風に釣られこゝろの家路哉

「棚倉」は現在の福島県東白川郡棚倉町か。

早乙女村を過る

579 村の名を聞てほめけり稲の藁

「早乙女村」は現在の栃木県塩谷郡早乙女か。奥州街道沿いにある。

白河戦場跡

722 虫の鳴こゝには誰か死跡ぞ

「白河戦」はいわゆる戊辰戦争の一つ「白河口の戦い」をいうのであろう。慶応四年閏四月二十日から七月十四日に

かけて、奥羽越列藩同盟と新政府軍との戦いがおこなわれた。戦いに加わっていたかは不明だが、知人が戦死した可能性は高いのではなからうか。なお次の俳句が収録されている。

古関跡

677 ちる花や関こす君か歌のあと

右が能因法師の和歌を念頭に詠まれたものであるならば、「古関」は白河の関となる。

郡山伯木にやとりて

770 涼しやとく掃除に目の届

「郡山」は現在の福島県郡山市であろう。「伯木」は不明。「柏木」であれば、郡山に「柏木」姓の商人がいる。

須か川か双松の舩中

1163 時鳥舩は難場も過にけり

「須か川」は現在の福島県須賀川市か。「双松」は不明。

信夫山にて

1165 山の名にめて、待也子規

明治初期・福島県俳人の「俳句書留」について（綿拔）

「信夫山」は現在福島県福島市にある山であろう。

以上の前書きをみる限りでは、書留者は、今の福島県内在住の俳人と考えてよいように思われる。また次の俳句がある。

- 805 信濃路や聞ははたこは今年そは
 806 露寒し起ての後の明の鐘
 807 途中から馬戻しやる花野哉
 808 よい人の木賃とまりや鹿の声
 809 月澄や海より低き磯の家
 810 先菊を見て草鞋とくやとり哉

目的は不明だが、信濃国に旅したおりのものではないかと思われる。

「俳句書留」には家族に関する句もみられる。

- 重陽に生れて菊太郎と名付たるもの、三日にしてうせたりけるに
 202 壽をこめた甲斐なし菊の露
 正月二日妻の別に
 352 初夢を見ぬ間に夢と成にけり
 母の新盆に
 583 虫と夜を鳴てへらすや草の庵
 妻弟身まかりければ

628 ものたらぬ夕餉の膳や秋の雨

家族の全体は不明だが、子の一人をはやくに失い、妻と妻の弟よりは長生きしたことがわかる。先に「麦蒔き」の俳句をあげたが、次の俳句もある。

紅塵にまみれ居る身は

666 稲つむや去年の心のときれより

668 田作りの愛たき形もつくるはん

こうした俳句からして、専業か兼業かはともかく農業に従事していたことがうかがわれる。

三

「俳句書留」には、書留者本人以外の俳人の句もおさめられている。以下に整理しておきたい。洋数字は俳句の通し番号である。なお矢部楯郎編『福島縣俳人事典』（昭和三十年六月、福島県俳人事典刊行会）に記述のあるものは、それを付記した。ただし『福島縣俳人事典』に付された詠句は除く。また同号異人があるものは併記した。

壮山

1、19、46、92、105、137、149、176、183、198、207、209、228、232、237、253、295、297、322、
332、390、409、494、494、544、559、572、593、662、668、679、702、712、720、771、835、859、865、
866、869、873、884、947、954、958、975、990、992、1024、1012、1027、1046、1065、1070、1077、
1088、1119、1127、1130、1148、1166、1192

須賀川。道山三次郎。幼名莊吉。栗の本、竹晷亭、芳秋軒等の号があった。天保四年五月二十七日生。明治三十三年十二月二十一日没。年六十八。諏訪祭場に葬った。若冠二十八歳で「柱石集」を編み、明治二十六年芭蕉翁の二百年忌を修して「早苗のみけ」を編集し、次で「亀齡集」⁽²⁾、「雪みくら」を著した。壮年瀬戸堀に瀟洒なる邸宅を構え可伸庵と名づけた。当時有名な宗匠として天下の俳人で東北に杖を曳く者悉くその門を叩き、子規も立寄っている⁽³⁾。画を善くし自画賛物等残つて居るものが多い。

清知

6' 43' 60' 82' 100' 141' 181' 189' 203' 208' 245' 371' 376' 407' 450' 513' 521' 571' 577' 614' 713' 736' 800' 828' 850' 862' 868' 891' 895' 948' 982' 1001' 1019' 1049' 1052' 1069' 1075' 1084' 1094' 1113' 1144' 1156' 1161' 1178' 1180' 1183

須賀川。山辺知一。清民の孫で晁窓の子である。

漸風

10' 24' 48' 64' 95' 121' 123' 158' 178' 187' 199' 224' 233' 238' 398' 656' 665' 683' 711' 730' 801' 847' 872' 977' 995' 999' 1003' 1006' 1016' 1047' 1050' 1072' 1086' 1133' 1169' 1190

松濤

12' 70' 117' 151' 167' 188' 242' 271' 273' 309' 317' 326' 366' 392' 477' 510' 538' 557' 598' 735' 738' 788' 842' 885' 940' 967' 1033' 1108' 1129

「須賀川。西山氏。明治九年十二月二十日没。十念寺に葬る」もしくは「小沢成田。渡辺氏。明倫雜誌に

土国

15' 26' 75' 96' 109' 132' 154' 174' 185' 191' 193' 247' 230' 234' 243' 248' 262' 285' 308' 311' 359' 400' 413' 515' 516' 530' 531' 547' 555' 566' 584' 596' 637' 695' 726' 793' 839' 858' 867' 944' 966' 987' 1012

須賀川。柳沼氏。明治五年一月二十八日没。

庚華

30' 50' 80' 122' 210' 225' 246' 310' 316' 560' 610' 708' 716' 775' 837' 861' 870' 935' 978'

1000' 1018' 1026

須賀川。杉原丈平。徽雨とも号した。明治二十年四月十二日没、年六十二。長祿寺に葬る。

清甫

33

須賀川。村越氏。明治四年七月八日没。

文起

36' 58' 112' 133' 165' 575' 719' 798' 849' 855' 860' 871' 980' 998' 1011' 1020' 1025' 1120' 1125' 1177

須賀川。塩田治右衛門。主一庵、栗窓と号した。明治二十七年九月十七日没。年六十四。諏訪神葬墓地に葬った。陸山と号して画もかいたとらう。

乙玉女

39' 85' 94' 99' 119' 129' 160' 179' 195' 226' 244' 302' 397' 508' 553' 562' 699' 714' 734' 796' 846' 863' 894' 859' 1004' 1022' 1048' 1073' 1082' 1087' 1111' 1122' 1140' 1159' 1173' 1202

須賀川。柴原氏。明治十二年九月二十八日没。

扶伯

52' 56' 93' 98' 118' 128' 162

富水

55' 436' 457' 460' 660' 661' 779' 851' 951' 1115

石川郡泉村小高字牛久保。高原東助。名のり満辰。農業。明治三十一年没。七十九歳。

上風

87' 97' 103' 126' 166' 229' 563' 567' 607' 718' 725' 857' 1015' 1023' 1081

須賀川。渡辺氏。明治四年五月二十七日没。

袋駒

115' 335' 804' 875' 1043

福島。原太市。陸沈堂と号した。「奥羽紀行」「島めぐり」「西馬集」「しのめ」「槻弓」等に入集。

西美

116' 346' 422' 471' 619' 767

福島。鐸木氏。名は誠信。馬巖の父で明治十三年十一月十日に没した。信夫山墓地。

窪州	192' 235' 236' 239' 240' 305' 554' 564' 697' 715' 729' 841' 994' 996' 1014' 1137
旧池	206' 227' 231' 241' 267' 306' 363' 402' 429' 561' 565' 717' 737' 780' 838' 971
	須賀川。市原又次郎。多代女の曾孫のせん <small>の</small> 夫。鏡田常松氏より入婿。酒造業。和歌もよくして独笑と号した。県会議員、参議院議員にも当選。大正十二年四月十七日没、年七十九。十念寺に葬る。
春洲	211
東丈	353
才治	373' 382
盧	437
ふみ女	438
	石川郡泉村。雷神社の献額に載る。
巖	439' 459
貞儀	440
	石川郡泉村小高。
岩水	441
	石川郡泉村。
末彦	442
高丘	443
	石川郡泉村。雷神社額に載る。
泉流	444
	石川郡泉村。雷神社額に載る。
雅水	445

貞齋 446

和香 447

石川郡泉村小高。添田和右衛門。明治二十年頃九十余歳にて没。

司書 448

「石川郡泉村小高。雷神社額に載る」もしくは「石川郡蓬田村。明倫雜誌に名が見えている」。

菊也 454、450

二本松。大内善七。さくやとも書いた。多数の俳書に名が見えて相当活躍した人である。明治十九年十一月八十一歳で没した。龍泉寺に葬る。

晴山 456

須賀川。市原朔助、通称綱起。白河市川氏から入婿し多代女の長子蝶二の嗣となった。明治十六年七月没。十念寺に葬った。

藤休 461

石川郡泉村。

休山 462

石川郡泉村。雷神社額に載る。

田幸 463

石川郡泉村。雷神社額に名が見えている。

よし女 464

「梁川中木菜史の妻」もしくは「石川郡泉村小高。高原のぶ」。

桜岡 467

石川郡泉村小高。

- 柏青 468
 「石川郡泉村小高」もしくは「掛田。湯浅三碩。松径堂と号した」。
- とめ女 469
 「桑折」もしくは「石川郡泉村小高。首藤とめ」。
- すて女 470
 石川郡泉村。雷神社額に載る。
- 石齋 486' 512' 528' 552' 651' 670' 732' 792
 安達郡木幡村。
- 斜月 498
 富山 578' 632' 748' 907' 1089' 1099
 伊達郡富田村小神。安斎富太郎。
- 西美 471' 619' 767
 福島。鐸木氏、名は誠信。馬巖の父で明治十三年十一月十日に没した。信夫山墓地。
- 保山 629' 759
 688
- 太年 688
 690' 709' 727' 784' 856' 957' 963' 1013
- 米保 693
 711' 723' 955' 973' 1009' 1051
- 無良 693
 864' 897' 932' 1053
- 見終 711' 723' 955' 973' 1009' 1051
 「福島」もしくは「伊達郡白根村大久保」。
- 為心 864' 897' 932' 1053
 888
- 連山 888

双兔	913
寸馬	923
雪蒼	937' 964' 1021' 1171
丈平	1067' 1121' 1126' 1151' 1188
公雨	1076' 1083' 1085' 1128
某	1105
直澄	1197' 1199

一句しか書き留められていない者も少なくないが、量的には六十人を超えており、書留者の周辺には、俳句を嗜む者が少なからずいたことがうかがわれる。

このうち「壮山」が「道山壮山」であれば、『俳文学大辞典 普及版』（平成二十年一月、角川学芸出版）に立項され、以下のようにある。

道山壮山 俳人。天保四（一八三三）・五・二七〜明治三三（一九〇〇）・一一・二一、六八歳。陸奥国（福島県）須賀川生れ。本名、三次郎。別号、栗の本。青年期に『柱石集』（万延一）、芭蕉二百年忌に『早苗のみけ』（明治26）を著す。明治初期の東北地方を代表する宗匠。明治二六年に正岡子規が立ち寄っている（高久田澄子氏稿）

字数の関係であろうか、右には記されていないが、壮山の師は山辺清民（1753-1867）とされる⁽⁴⁾。「俳句書留」には以下の前書きがある句がある。

清民翁の跡を慕ふて諸君子の初会につらなり己も己も翁の徳に浴せんとす

1197 香にめて、ふと這入りけり梅の門 持田氏直澄

右の「初会」に壮山が一座していたことは可能性が高いと思われる。

なお、江戸時代に引き続き、明治時代にも、いわゆる旧派の俳人たちをおさめた類題集が少なからず発行されている。その一つに三森幹雄⁵編『俳諧新選明治六百題』がある。明治十二年一月二十日の出版で、出版人は高木和助（浅草区北元町七番地）である。下巻末に、本名はなく俳号だけが、国別の名録がある。その「岩代」には、松圃、暁窓、清知、壮山、丈平、袋知、文起の七人があがる。「俳句書留」に名がみられないのは、松圃、暁窓の二人のみである。松圃は『福島縣俳人事典』に「塩川。中島屋豊島篤吉。（中略）明治二十五年七月二十八日越後高岡で没した」とある。同じく暁窓は「須賀川。山辺俊。清民の男。春斎と号した。明治三十三年二月二十一日没、歳七十九。諏訪墓地に葬った」とある。書留者が、もしこの二人のうちのどちらかというのであれば、暁窓ではあるまいか。万延元年（一八六〇）冬に刊行された『柱石集』（須賀川市立中央図書館蔵）の刊記には以下のようにある。

清民門人 道山壮山 編

清民男 山辺春斎

上野北石原 石坂白亥 校

東都 浅見野井

「俳句書留」を書き留めた時に「春斎」と名乗っていたとしても、「俳句書留」に「春斎」の号は記されていない。すなわち、息子の清知の句が多く記されているにもかかわらず、その父・暁窓（春斎）の句が「俳句書留」に記されていないのは不自然である。書留者とは不仲であったとかの理由があるかもしれないので断定はしがたいが、暁窓が書留

者である可能性のあることは指摘しておきたい。

四

先に冒頭から26の句をあげたが、技巧を凝らしたのではなく、折々の日常におきたことを率直に詠んだものと思われる。

また「14出る月の向ふて軽し枯尾花」は「枯尾花」は冬の句、「15往もとり皆人くゝる柳哉」は「柳」で「春」の句なので、14は慶応三年、15は慶応四年の詠句と考えられる。「明治」に改元されたのは九月八日だが、慶応三年末から慶応四年はじめが社会的に平穏であったとはいえない。それにもかかわらず、詠句対象は、自然や自身とその周辺にとどまり、時事的なことなどは直接的には詠じられていない。かつて永六輔氏は、昭和二十年八月十五日の日記を収集・編集した『八月十五日の日記』（一九九五年六月、講談社）の「はじめに」で以下のように述べている（三頁）。

毎日の空襲が、日常の暮らしの中にとりこまれていて、その中で平凡な暮らしを書きつづっている日記もある。戦争だろうが平和だろうが、毎日の暮らしそのものは二十四時間ずつの繰り返しで本質的に変わらないのだろうかとも思ってしまう。

俳号が記された俳句には次の句もある。

王政復古の今日に逢奉る身の嬉しさは

184 新らしきむかしになりて花の春 土国

明治初期・福島県俳人の「俳句書留」について（綿拔）

しかし俳号が記されない、すなわち書留者の句にはこうした俳句は皆無である。右の句の前後の句も

183 只居ても夜の更安きむ月哉

185 何事もせず日なたつむ月哉

と、生活の感想が述べられているに過ぎない。あえて深読みすれば

四月に聞ありて晩春花いまた開す

159 行雲に待ものひとつ暮の春

「があげられようか。「四月に聞」があるのは慶応四年である。「待つもの」とは「開花」であり、この年の春が寒かったことを伝えてくれるだけでなく、時代が流れゆく中で春のような社会が来ることを待つといった、当時の社会のことが暗に詠みこまれている可能性はある。しかし、もしそのように読み取ることができたとしても、それはあくまでも「暗に」である。

「平凡な暮らし」や日々の気持ち等を詠んだ俳句には、他の俳人の句とわずかに異なることはあっても、大いに異なる「個性」は見出しがたい。「月次俳句」といってよいだろう。そこに文芸としての価値を見出すことは困難であろう。

しかしながら、郷土資料としては、当時の「平凡な暮らし」をうかがうことのできる貴重なものである。たとえば「112 紙子着てまめになりたる出入哉」という俳句がある。なぜ紙子を着ると「まめ」になるかの説明はない。しかし、「116 着はして猶暖き紙子哉」とあることによって、紙子を着用すると暖かく、活動的になることが想像される。紙子を着ていた事実は知られていようが、それをどのように思っていたかの資料はみつげがたい。

身辺雑記ともいべき俳句は、幕末から明治はじめにかけて生きた俳人の日常を知るにはよき資料であり、そこで詠じられた情景は「原風景」と称すべきものと考えている。「俳句書留」は当時の須賀川の人の生活をうかがう資料として今後の活用ができるものと思われる。

注

- (1) 矢部権郎『福島縣俳人事典』（昭和三十年、福島縣俳人事典刊行会）に「須賀川。山辺頼之。観山居と号した。多代女の高弟。慶応三年十二月九日没。七十五歳。普心寺に埋葬したのであったが、後神葬に改めたため諏訪墓地に改葬した。多数の俳句に句が載って居る」とある。

- (2) 須賀川市立中央図書館所蔵。道山壮山の還暦賀集。乾坤、中本二冊。刊記は以下のようにある。
明治廿七年十二月

編輯兼 道山三次郎

発行者 岩城国須賀川町

印刷者 猪爪素吉／東京浅草区新福井町五番地

文音所 道山壮山

鶯立、採花女、永機、尋香、羽洲等の詠句が見られ、壮山が当時の名だたる「旧派俳人」と交流があったことが知られる。特に旭齋とは親しかったようで、明治二十年、共に東海道線の汽車にのって伊勢参宮をしており、車中の対吟が収録されている。また『亀齡集』に収録された、暁窓らと壮山が巻いた連句は一枚刷りとなっており、須賀川市立博物館図録「俳諧摺下」（平成十一年）に写真と翻刻がおさめられている。

- (3) 子規の句は『柱石集』と『亀齡集』にみられる。

- (4) 『雪みくら』（須賀川市立中央図書館所蔵）巻末に「亡師清民翁三十年追善の鹿集（中略）明治三十年一月 壮山拝」とある。また『墨蹟集 下巻』（綿抜蔵。書名不明。嘉永五年醒庵主人西馬跋・金海堂蔵版）には「壮山 道山氏別号長安亭俗称 莊吉住于奥州須賀川 清民門人 留守の戸に立てをしむや松の月 壮山」とあり、また清民（1753-1867）については「清民山辺氏別号慈悲庵又観山通称清作 住于奥州須賀川 膝究て見れば涼しき芦屋哉 清民」とある。なお『柱石集』を校した石

坂白亥は志倉西馬に学んでいる。

- (5) 三森幹雄(1880-1910)は、須賀川と同じく旧白河藩領であった石川郡形見村(現・福島県石川郡石川町)の出身。なお関根林吉『三森幹雄評伝 三十余年幹雄研究の結晶』(二〇〇二年)を出版した、関根氏の長女遠沢繁氏は今栄歳先生に学ばれ、その出版には今先生が御尽力されたとのことである(道山昭爾『須賀川俳諧の系譜』平成二十九年、私家版)。

【附記】 末尾ながら、本稿をなすにあたり、貴重な資料の閲覧のご許可をいただいた須賀川市立中央図書館に厚く御礼申し上げます。